

日本古典
評釈
全集
叢書

好色一代男全注釈

上卷

前田金五郎

角川書店

日本古典評釈・全注釈叢書

好色一代男全注釈 上巻

全二冊



昭和五十五年二月五日 初版発行

著者

前田金五郎

発行者

角川春樹

印刷者

中村武

製本者

鈴木俊一

発行所

株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三
振替 東京三一九五二〇八
電話 東京〇七七一(大代表)
郵便番号 一〇二

落丁・乱丁本はお取替へ致します

Printed in Japan

信教印刷・鈴木製本

3393-761029-0946(0)

目次

凡例

好色一代男 卷一

けした所が恋のはじまり

はづかしながら文言葉

人には見せぬ所

袖の時雨は懸るがさいはい

尋てきく程ちぎり

煩惱の垢かき

別れは当座はらひ

好色一代男 卷二

はにふの寝道具

髪きりても捨られぬ世

三

七

四

四

三

八

二〇

二九

三三

一五

二四

一五

女はおもはくの外

誓紙のうるし判

旅のでき心

出家にならねばならず

うら屋も住所

好色一代男 卷三

恋のすて銀

袖の海の肴売

是非もらひ着物

一夜の枕物ぐるひ

集礼は五匁の外

木綿布子もかりの世

口舌の事ふれ

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

凡 例

一 底本には、横山重氏所蔵荒砥屋初板本を使用した。
 一 校訂にあたっては、原本の面目を保ちつつ、かつ、読みやすいものにするため、次のような方針に従った。

(イ) 段落について

本文に、適宜に段落を設けて、別行を多く作った。

(ロ) 句読点について

底本には白丸・黒丸両点があるが、黒丸点に統一し、本文を読みやすくするため、私に句読点を加えたが、その場合には、白丸点に統一した。

(ハ) 漢字について

(1) 行・草体の漢字は、すべて現行の活字体に改めた。

(2) 底本の略字体・異体字は、特に読解に支障のないかぎり、現行の字体に改めた。

(3) 当時の慣用字、または誤字・誤刻・衍字と思われるものは、これを正し、必要と考えられる場合は「語釈」「解説」で説明した。

(4) 特に注意すべきものは、その異同を明らかにするために、当時の『節用集』その他の用字例と照合することに努めた。使用した『節用集』類の主なものとして、「語釈」「解説」に用いた略記号は、次の通りである。

文明本節用集（影印本）——文明本

天正十八年本節用集（写真）——天正本

易林本節用集（影印本）——易林本

黒本本節用集（影印本）——黒本本

饅頭屋本節用集（影印本）——饅頭屋本

下学集（影印本）

合類節用集（延宝八年刊）——合類

節用集大全（恵空編 影印本）——大全

反故集下（元禄九年刊）——反故集

和漢音釈書言字考節用集（享保二年初板本）——書言字考

倭玉篇（慶長十五年刊 影印本）——倭玉篇

和玉篇（古活字版無刊記本 日本古典全集所収影印本）

——和玉篇

同文通考（宝暦十年刊）四——同文通考

日葡辞書（勉誠社刊複製本）——日葡

落葉集（京大文学部刊 影印本）——落葉集

ロドリゲス日本大文典（土井忠生氏訳本）——大文典

増続大広益会玉篇大全（元禄四年刊）——玉篇大全

仮名・振り仮名について

(1) 仮名文字は、すべて現行の字体に改めた。

(2) 歴史的仮名遣いに一致しない例が多いが、底本通りに

して改めなかった。

- (3) 衍字・誤刻・清濁の誤りと見られるものは正し、必要と思われる場合は、「語釈」「解説」で説明した。
- (4) 私に補った振り仮名は()内に記入した。

(a) 反覆記号について

反覆記号の使用法は、現行の慣習に従い、特に必要と認められるものは、「語釈」「解説」で説明した。

(b) その他

- (1) 挿絵は、本文の該当箇所に収めた。
- (2) ハ・ミ等の片仮名は平仮名に改めた。

口語訳について

逐語訳を基本としながら、現代文として通読にたえるものを目ざしたが、能力の限界から、極めて不十分なものに終わったので、原文通読の参考程度に利用していただければ幸いである。

語釈について

先学の注釈で、定説と考えられるものは、そのまま引用、あるいは筆者のダイジェストで記述したが、引用した主なものと、その略記号は、次の通りである。

『西鶴輪講好色一代男』林若樹・山中共古・三田村鳶魚・山崎楽堂・木村仙秀・勝峰晋風・服部晋白・柴田宵曲。ほかに、追記の真山青果・藤井紫影・佐藤鶴吉・忍頂寺務・宮武省三ら。——『輪講』三田村氏等

山口剛『西鶴好色本研究』その他の諸論文(山口剛著作集・巻一。昭和四十七年・中央公論社刊)——山口氏

藤井乙男『西鶴名作集』(評釈江戸文学叢書・巻一。昭和

十年・講談社刊)——藤井氏

南方熊楠『読』『一代男輪講』その他、雑誌『彗星』等所収論文(南方熊楠全集・巻四。昭和四十七年・平凡社刊)

——南方氏

真山青果『西鶴随筆』『西鶴語彙考証』『西鶴雑話』(真山

青果全集・巻十六。昭和五十一年・講談社刊)——真山氏

折口信夫『好色一代男』(折口信夫全集ノート編・巻十七。昭和四十六年・中央公論社刊)——折口氏

藤村作『訳註西鶴全集』巻五・好色一代男(昭和二十六年・至文堂刊)——藤村氏

野間光辰『定本西鶴全集』巻一(昭和二十六年・中央公論社刊)——野間氏

板坂元『西鶴集』上(日本古典文学大系・巻四十七。昭和三十三年・岩波書店刊)——板坂氏

暉峻康隆『井原西鶴集』巻一(日本古典文学全集・巻三十八。昭和四十六年・小学館刊)——暉峻氏

島田勇雄『文法セミナ——西鶴『好色一代男』』(『文法』昭和四十五年一月——同四十六年三月号、七回連載)——

島田氏

湯沢幸吉郎『徳川時代言語の研究』(昭和三十年・風間書房再刊本)——湯沢氏

佐藤喜代治『西鶴の小説における用字についての試論』(『東北大学文学部研究年報』一三号(下)——佐藤氏

堀一郎『我が国民間信仰史の研究 宗教史編』(昭和二十八年・創元社刊)——堀氏

なお、『源氏物語』を典拠とする事項については、原則とし

一 「総説」の項で記すことにした。

また、引用文は読みやすくするために、西鶴の作品以外は手を加えた。

一 口絵・挿図等について

本文の解釈と鑑賞に必要な、底本の影印・絵画・説明図・現地写真・地図などを、口絵・挿図として掲げた。

一 総説について

本作品の注釈・鑑賞に必要な事項に関して解説した。

一 底本使用及び参考文献たる近世版本多数の借覧については

横山重氏、『日葡辞書』の翻訳については森田武氏、紋様については斎藤喜三氏、二、三の史料調査については小川武彦氏の助力を得、その他の事項については、本文中に記名の各氏から高教を賜った。以上の方々に篤く感謝いたします。

昭和五十二年一月五日

前田金五郎

繪入

好

色

一

代

男

一

好色一代男

巻一目錄

七 歳

けした所ところが恋こひはじめ
こしもとに心こころある事

八 歳

はづかしながら文ふみ言ことば葉
おもひは山崎やまざきの事

九 歳

人には見せぬところ
ぎやうずいよりぬれの事

十 歳

袖そでの時雨しぐれはかゝるが幸
はや念ねん者じやぐるひの事

十一 歳

たづねてきくほどちぎり
伏見ふししもくまちの事

十二 歳

ぼんのうの垢あかかき
兵庫風呂屋ひんぐふろや者の事

十三 歳

わかれは当座たうざばらひ
八坂茶屋やしかちや者の事

國歌

○けした所が恋はじめ「恋はじめ」は、生まれてはじめての恋情の意だが、他に用例を知らない。あるいは島津久基氏が『国文学の新考察』(一代男 交渉対比表)備考で、「世之介七歳の『恋はじめ』は光君七歳の『文はじめ』に基づいたのであらう」と推定されたように、「源氏物語」桐壺の用語「文はじめ」をもじった、西鶴の造語であらうか。なお山口氏が「源氏の君のふみはじめは七歳の時であった。……その聡明を直ちに翻して世之介の性的早熟と、……具体的にとり戻す時に『恋は闇』となったのである」と説くのも同様の推定である。また、『類船集』五に、「螢の灯す火に見ゆらん」ともし消ちなんずるとて、乗れる男の詠める。出でゝいなば限りなるべみ灯し消ちとなん」と引用する、『伊勢物語』三十九段の「天の下の色好み、源の至といふ人」の好色談のパロディとして、「けした所が」と冠したのであらうか。いずれも後考に俟つ。

○こしもと『好色伊勢物語』二に「有徳なる人の内義などの、そば近く召使はるゝゆへ、腰元の名あり」と語源を解説し、『好色床談義』二に「十より内は、かぶろにして召使わせ給ふ。十より三つ四つ過れば、腰元と名づけ、まさき・いつきなどゝ色めきたる名をつけ、大名の御前様又は町人なれば、有徳なる人の奥様に召使われ」とあり、『色道大鏡』五の一に「既卑相といふは、抑、人の子の婚嫁の始るところは、やむことなき方とても、外よりは求めず、召使はるゝ女中より事発り、町人以下奉公人までも、腰元・物縫ひ・はしたもなどより犯しそむるもの也。又其の家に、似合はしき者なきは、茶屋女・傾城の仮契に始るもあれど、多くは其の家内より、其の味を知りそめ

て外に移る、是常の例也」と記すのは、本文のよい注解。

○心ある事 欲情すること。

○はづかしながら「ながら」は形容詞の語幹に付いて、「であるが」の意を表す接続助詞。ここは憚りながらの意。湯沢氏は近松作『一心二河白道』上の「されば私ははづかしながら、さるお若衆に恋をいたし」と、富永平兵衛作『娘孝行記』二の「おはずかしながら是は小倉島でござんす。土産の印に上げます」の二例を引用し、「(お)恥しながら」の語形は「普通であるが、他の形容詞にはあまり附けて用いない様である」と説かれる。他に『好色敗毒散』五の三、「冥途の飛脚」上の二例が見える。

○文言筆 手紙の文章の意。

○おもひは山崎の事 「思ひは山の鹿かまにて、招くとさらに止まるまじ」(謡曲通小町)、または「思ひは山々」のように、思慕の情がしきりで抑え難い意に、地名の山崎を掛けた表現。山崎は京都府乙訓郡大山崎町。中世以降、木実油・荏胡麻油の一大生産地で、難宮八幡宮神人の身分をもつ油商人の手で、諸国に販売されていたが、近世初期以来、大阪を中心生産地とする菜種油・綿実油に圧倒された(吉川一郎氏『大山崎史叢考』)。

○ぎやうずい 行水。

○ぬれぬれる意と、思いを寄せる意をかける表現。「ぬれ当世の名目なり。憚はたたる良なり。思ひ寄りたる風情を、しなし言ひなす処をさしていふ」(色道大鏡一)。

○袖の時雨 和歌の用例では、袖を濡らす涙の意に用いられるのが普通。例えば「われ数ならぬ身なれども、手向のためにかくばかり、古りはつる此の一本の跡を見て袖の時雨ぞ山に先立

つ」(戯曲六浦)のごとし。しかし本文では、袖に降りかかる時雨のこと。

○かゝるが幸 「かゝる」には、時雨が降りかかる意と、相手に色目を使う意とを掛けた。

○念者ぐるひ 「念者」は男色(男性の同性愛)で年長者のほうをいい、兄弟とも称する。若年のほうを若衆といい、若衆が念者に夢中になることを、念者狂いと称した。

○たづねてきくほど 尋ねて聞けば聞くほど縁が深くなること、の意。「ほど」は副助詞で、「その事柄に比例する意を表す」(湯沢氏)。「大文典」に「直説法に立つ動詞の後に置かれたものは、愈々益々といふ意を表す。例へば聞く程、見る程、書く程。道を歩く程くたびる。歩けば歩くほど益々疲れる」と、既に明確に説く。西鶴にも、「其後は、氣付て見るほど黯しき事にぞありける」(本書一の二)、「然も其形うるはしく、氣を留て見る程美女なり」(日本永代蔵三の五)の用例が見え、湯沢氏は、「こゝに御座る程悪い」(仏母摩耶山開帳中)のほか、近松作品の三例を挙げられたが、いずれも今日の「言えば言うほど」「見れば見るほど」の句形の上半がない形式である。

○ちぎり 契り。男女の縁。

○伏見しもくまち 伏見鐘木町(本名 夷町。京都市伏見区鐘木町)の遊廓。慶長元年に始まり、一時衰え、慶長九年十二月二日再興(色道大鏡二二、諸艶大鑑六の二)。なお「鐘木 シュモク」(易林本・大全・合類等)が正しいが、「鐘木 シモク」(運歩色葉集・類船集六)もあり、「鐘木 シモク」の用字・発音は当時の慣用。

○ぼんのうの垢かき 諺「煩惱の垢(煩惱は垢のように、絶え

ず生じて尽きない、の意)」に、「垢掻き(湯女の名)」を掛けた。「掃除してあれにひら様のお立ある 西六 かつてさばるに煩惱の垢 西鶴 渡川土用干にも埒明ず 西吟」(西鶴五百韻)、「煩惱の垢落し難し」(本書二の七)等がある。入湯客の垢を掻くので「風呂屋女……昔はあかきといひしが、今はしやれて猿とも名づく」(好色床談義三)の異名が生じた。

○兵庫 兵庫湊(神戸市兵庫区)。その磯之町に遊女町があったが、寛文四年三月四日の大火以後停止された(色道大鏡一三)。

○風呂屋者 風呂屋の湯女をいい、垢掻きに同じ。兵庫の風呂は、慶長十年前後からその名を知られていた(神戸市史別録)。

○当座ばらひ 現金払い。「当座払に万ヶ様の分ぞかし」(諸艶大鑑二の三)、「当座払ひのかり棧敷」(好色一代女五の四)。なお「座」の原文「座」は「座の草体より誤」(野間氏)った俗字(俗書正譌)。

○八坂茶屋者 八坂は京都祇園神社から清水寺三年坂に至る地名。当時、祇園・清水・八坂辺に色茶屋が多く、そこに勤めて給仕のかたわら色を売る女を、茶屋者・茶屋女といった。

解説

○書名「好色一代男」について 「好色」を冠した書名の先行例については、頼原退蔵氏「浮世草子の発生と展開」(『江戸文芸論考』)に以下のごとく記されている。すなわち渋井清氏『元禄古版画集英』第一輯所載の「好色浮世絵版画目録」に菱川師宣の『好色伽羅枕』『好色物語』『好色吉原春駒』の三種が見えるので、「少くとも書名として、この勇

敢な試みをした最初の人は師宣であつたらしいので、本『好色一代男』の「命名は、実にそこから示唆を得たものではなかつたらうか」。さらに「天和二年仲春吉日、丸屋源兵衛^板」の『好色袖鑑』(上下二冊、ただし頼原氏の実見されたのは下巻客本のみ)を挙げ、「たとひ西鶴が『好色袖鑑』の先行に気づいて居なかつたとしても、名実ともに彼を好色本の祖とする事には、一応躊躇しなければならぬであらう。特に『好色袖鑑』がその名のみならず実に於いてもすでに一代男の先蹤をなすものであつたなら、近世小説史の數頁は書きかへられなければならない程、極めて重要性を持つて来るのである。しかしそれはやはり従來の仮名草子の範疇から、一歩も多く出るものではなかつた」と論ぜられ、この本が問答体を借りて恋愛道を述べた教訓書である旨を断じられたが、これらの先行例の影響は当然のことと思われる。また『好色袖鑑』は、正徳五年正月吉日、菱屋治左衛門から、『風流色道訓』と改題して後刷されているが、その作者については、吉田半兵衛と推定された吉田幸一氏の考証が、『好色物草子集』諸本解説の項に見える。

次に、「一代男」の語義は、「自分一代きりで後嗣のない男をいふのである」。天明・寛政ごろに成った稿本『贅論尽』には、明らかに「一代男といふことあり、一生子なくくらす男、一代女、これも嫁入しても子得うまぬ女、仮令養子相続あれど弔薄し」と説明してある」と記された、頼原退蔵氏「西鶴用語考」(『川柳雜俳用語考』)には、「一代男」の用例十三を挙げ、ほかに、「一代何々といふ語は、この外にもなほ多く散見する。いづれも一代限りのもの、又は一代をある状態で立て通すこと等の意である」と説明され、「一代女」「一代後家」「一代念者」



巻一目録

「二代分限」「一代人」の諸例を引用されているが、ほかに筆者の目に触れた用例では、「黒田甲斐守長政老臣後藤又兵衛ガ嫡子、後藤隠岐守ト申ス者(を)……(片桐)市正(が)……堺ノ津ニテ家ヲ借り、金子二三百両宛合力シテ隠シ置キタ。父又兵衛ハ子ノ行衛ヲモ知ラズ、年月モ立チタレバ、帰参サセテ賜ハリ候ヘト、様々詫ビケレドモ、長政曾テ承引無シ。又兵衛是ヲ不足ニ思ヒ、我ハ一代男也。何モ望ミ無シト常々申シケルガ〔本例の一代男の男は武士の意で、後藤家は又兵衛一代限りという文意〕」(武蔵義話一五)のほか、「一代浪人」(諸和氣姥桜五の二)、「一代若衆」(好色難波男三の六)、「一代男」(心葉)、「一代もの」(記録會我女黒舟七)がある。以上で本書名の含む意義については明白であらう。

○目録小見出しについて 本書の目録の年立の下には、本題

「けした所が恋はじめ」、副題「こしもとに心ある事」のように、本・副題が二行書きの小見出しとして記載されているが、これについて、吉江久弥氏『「好色一代男」成立攷』（『西鶴文学研究』）には、巻四までの本題は、各章ごとに「大概その何れもが俳諧的連想の跡を辿ることが出来るものであるに反して」、巻五以後のそれは、「大概連想的連関が全く無いが、あつたとしても極く稀薄なものに過ぎないのである」「その理由として色々の事が考へられもしようが、私としてはその裏に創作態度の相違が潜んでゐて、それが自らかゝる点に表れたのではないか」といふ感じの萌すのを私拭する事が出来ない」と推定され、堤精二氏『「好色一代男」と「諸艶大鑑」——その成立をめぐっての試論——』（『国語と国文学』昭二九・七）には次のように述べられている。「目録の副題の書き方からして、二つの異った様式が見られる。即ち、巻一から巻五までの目録には、八坂茶屋者の事・仁王堂飛子宿の事・大はらざこ寝の事・越後寺泊り遊女の事・信州追分遊女の事のように、多くは地名を明記しながら、その土地にまつわる種々の女色（或は男色）の類型を列記している。これに対して巻六以下は二三の例外を除いて、『新町夕ぎりが情の事』『江戸吉原よし田が利発の事』『今のかほる装束好の事』のように殆ど全部遊女の名が明記されている。このことは、前半（巻一―五）では刻明に世之助の好色修行の遍歴をあとづけて一代記を記述し、後半ではむしろ個々の遊女の評判に中心が置かれている事を意味する。……前半の部分が世之助の一代記的性格があるとすれば、後半の部分には三都の遊女評判記的性格がある」。また、島田氏は以下の考察を示されている。すなわち、本題は「辞句についてはそれぞれ長短さ

まざまであるものの、内容的にはほぼその章段の中心的事件・場面などを表わしている。それに対し「副題は「辞句の上では『——の事』という形式に統一されており、内容的には主として素材となる人・場所・事物など表わしている」、そして「本文では年齢を略し、本題のみを見出しとして掲げ、副題も略してある。本文部分におけるこのような方針は、本題に重点を置いていることを端的に示したものと見えよう」、このことは「本題と副題との関係が偶発的なものではなく、意図的なものであることを示している」さて、この首章の見出しと巻一の目録の本題との間には、辞句に小異がある。すなわち、目録の『恋はじめ』が見出しでは『恋のはじまり』になる。このように目録と見出しとで相違するものは、このほかにもある」「これらの相違がどのような事情のもとに生じたのか、明らかでない。それについての考えの一つとしては、目録も見出しも西鶴自身がその草稿を作り、すでにその西鶴の草稿の段階においてこのような差異が生じていたであろう、とすることが可能である。これがもっとも常識的な考え方といえよう」「さらにまた考えられることには、目録・見出しなどの西鶴の草稿が完成されており、それを板下にするさい、西吟が自分の思いつきで適宜辞句を改めたということも、ありえないことではない。くり返し述べたように、板下書きがかなづかいなどの表記を自己流のそれに改めることは普通のこととして許されていたことであろうし、そのような状況の中ではこのついでに「二の辞句を改めたからといって、それが重大問題にまで発展するような情勢ではありえないからである。ざっとみても、以上のような各種のばあいが想定できる」「それでは、目録と見出しとの異なるものでは、

いずれを新案、あるいはより彫琢されたものとすべきであろうか」と問題提起し、二例を挙げて考察し、「それらのように、本文の見出しのほうにすぐれていると思われるものがある。その見出しは西鶴の案か、それとも西吟が板下を書くさいに改めたものかとなると、にわかに結論は下しがたい。もし目録が旧案で、西鶴の草稿によったものと考え、見出しが新案であると考えるならば、その新案は、いろいろと考えうるばあいの一つとして、西吟の改案であろうと推定することも可能である」。

以上の三氏の考察は、本・副題が含有する意義について、いろいろと啓示される点が多いが、この本・副題の形式の相違その他の問題は、本書の成立・構造に関連する事項であるとともに

けした所が恋のはじまり

桜もちるに歎き、月はかぎりありて、入佐山、爰に但馬の国、かねほる里の辺に、浮世の事を外になして、色道ふたつに、寝ても覚ても、夢介と、かえ名よばれて、名古や三左、加賀の八など、七ツ紋のひしにくみして、身は酒にひたし、一条通り、夜更に戻り橋、或時は若衆出立、姿をかえて、墨染の長袖、又は、たて髪かつら、化物が通るとは、誠に是ぞかし、それも彦七が良して、願くは咀ころされてもと、通へば、なを見捨難くて、其比名高き中にも、かづらき、かはる、三夕、思ひくく身請して、嵯峨に引込、或は、東山の片陰、又は藤の森、ひそかにすみなして、契りかさなりて、此うちの腹より、むまれて世之介ト名によぶ、あらはに書しるす迄もなし、しる人はしるぞかし。

に、西鶴の以後の浮世草子の本・副題の形式、すなわち、『艶大鑑』は、本題のほかに三つの副題をもち、その「副題は、彼がその一篇の中に描かうとした評判記の世界、もしくは彼がそこで語らうとした評判記の事実を、実は標題化したものであるといふこと」(野間光辰氏「浮世草子の成立」『西鶴新攷』)、あるいは、目録副題一行なのが、『好色五人女』『本朝二十不孝』『懷硯』『武道伝来記』『新可笑記』『日本永代蔵』『日本永代蔵』一―五、五行なのが『好色一代女』三行なのが『男色大鑑』である事実等と併せ考えられるべき問題であることを指摘するに止める。